

イエス・キリストの信実

ローマ三・22 すなわち、イエス・キリストの信実により、信じる者すべてに与えられた神の義です。そこに何の差別もありません。

同26 このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスの信実による者を義となさるためです。

ガラテヤ二・16 けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストの信実によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストの信実によって義としていただくためでした。

同20 生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子（キリスト）の信実によるものです。

同三・22 しかし、聖書（律法）はすべてのものを罪の支配に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストの信実によって、信じる人々に与えられるようになるためでした。

エフェソ（「第二パウロ書簡」とされる）三・12 わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストの信実により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。

フィリピ三・9 わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストの信実による義、その信実に基づいて神から与えられる義があります。

1

ここに掲げた章節は、（その文脈において）いずれもパウロが説いた福音の要約ないしは中心と言ってよい重要なことばである。引用は「新共同訳」だが、傍点部分はすべて「イエス・キリストを信じること（者）、一への信仰、一に対する信仰」を「イエス・キリストの信実」と訳しかえたものである。読んで、どのように感じられるだろうか。

この句はギリシア語で「ピスティス イエスー クリストウー」と言うが、この「ピスティス」（日本語聖書では殆ど常に「信仰」と訳す）を修飾する「イエスー クリストウー」は属格で、属格には主格（主語）的と対格（目的語）的の両様の意味があるとされる。「新共同訳」はすべての場合対格的に解して、「イエス・キリストの信仰」ではなく、「一を信じる、（への）信仰」としているのである。そして、これは新共同訳に限らず、文語訳、口語訳、新改訳、フランシスコ会訳、さらに RSV、N(R)EB、NIV などの英語訳も殆どが採用している解釈・翻訳なのである。

しかし、パウロは「キリストを信じる（信仰）」と言う場合、「エイス」か「エン」という前置詞を用いるのが普通で（いちいち例を挙げないが）、属格の用法とは明らかに違う。したがって、これらを「キリストを信じる信仰」と解するならば、属格の方はこれと同じ意味になる対格的にではなく、主格的に「キリストの信仰」と解する方が理にかなうのではないか。ただし、訳語としては日本語の「信仰」は不自然なので、「信実」としたが、「誠実（ローマ3 :

3の新共同訳)、真実、まこと(前田訳)などが考えられるであろう。前記のガラテヤ二・16中の「信じました」はイエス構文で、イエスのわたしたちに対するピステイス(信実)と、わたしたちのキリストに対するピステイス(信仰)とが見事な対応をなしている。

2

私がこの問題に気付いたのは、もう30年以上の昔、ちょうど「キリスト教夜間講座」に出講し始めたこともあって、ギリシア語の復習に夢中になっていたころのことであった。当時たまたま目にした2冊の本から、自分の読み方が必ずしも文法的にそう間違いではないことを、二人の新約学者によって確かめられ、うれしさのあまり「キリストの真実」という小文を綴って「テコア通信」に載せた(第64号、1973・5)。その二冊の本とは、

○前田護郎訳「ローマ書」(『世界の名著』12、中央公論社、'68、のちに前田護郎訳『新約聖書』同、'83)

○木下順治「パウロにおける所有格の訳し方について」(『聖書翻訳研究』3号、日本聖書協会、'71)

前田訳は「ピステイス」を一貫して「まこと」と訳し、ローマ書の該当箇所注として次のように説明している。「普通く信仰」と訳されるギリシャ語はピステイスで、くまこと」の意。人の意志や行為でなく、神から賜わるまことによって義とされ救われる、という新しい福音である。「人が信じて仰ぐ信仰でなく、地上でイエスだけが神に対してまことでありえて人の罪を負って十字架につかれた。この彼のまことによって神は罪ある人に義を恵まれる」。前田先生のこの注釈は簡潔だが、恵みのありか、

すなわち私どもの救いの根拠とその保証を示して余すところがない。

木下論文の特徴は、この句は「イエス・キリストの、わたしたちに対するピステイス(真実)」と解すべきであるとの主張にある。「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる」(二テモテ二・13、誠実・真実はいずれもピステイスと同根の語)ということばを思い浮かべる時、これまた深い霊的洞察であると思う。

この問題は、しかし、自分が気付いてみれば、既に多くの人によって取りあげられていたことに気付かされた。内村鑑三は早く1924年刊行の『ローマ書の研究』第18講において、この句の「文字は明らかに<イエス・キリストの信仰>とある。これをキリストのいだきし信仰と見るも、キリストに対する信仰(キリストを信じる事)と見るも、文字上にては少しも故障はないのである」と言い、結論としては彼なりの理由をもって後者を採用しているが、問題の所在はこれを的確に指摘している。そして言うまでもないことながら、内村はくり返し「信者の信仰そのものが神のたまものである」(『統一日一生』2月4日項など)と言明しているのである。

山本先生の見解については、先の小文を書いたあと直ぐに気が付いて、「テコア通信」の次号(第65号)に補遺としてその所論を掲載した。のちに改めて紹介する。

近年では、岩波書店刊『パウロ書簡』(青野太潮訳、'96)が伝統的に「イエス・キリストへの信仰」と訳し、注として「原文は<イエス・キリストの信仰>。この<の>を主格的にとつて<イエスがもっていた信仰>とするか、対格的にとつて<イエス・キリストへの信仰>とするかは論争されている。数の上では後者が圧倒的に優勢である」と説明している。昨06年秋、

札幌で持たれた「無教会全国集会」において、「『ローマ書』における神と人の信実」と題する聖書講義をされた千葉恵氏は、「イエス・キリストのビステイス」を「イエス・キリストの信実」と訳出し、この属格については、以下のように説明している。

「この属格は主格的でも目的的でも、さらには＜神秘的（霊的交わりの）＞属格でもなく、出来事の属格と解すべきである。イエス・キリストにおいて出来事になった＜信実＞が、それも直接的には神の信実が、そして間接的にはひとの信実双方がこの句において意味されている」。

聖書翻訳としては対格的解釈が優勢かも知れないが、研究者の間では主格的理解が増加しているようである。因に、かの有名な神学者カール・バルトは主格的理解に立っている由である。いずれにしろ、ここで注意しておくべきことは、私どもはこの属格の意味を主格的、対格的などとあれこれ分解、分析して詮索しているが、ギリシア語ではどこまでも属格という一つの表現形態であって、そこでは当然のことながら、私どもが二様なり三様なりに分析して理解しようとする事柄の内実が、分離されることなく一つのこととして把握・理解されているということである。このことは単にことばのことだけでなく、実は思惟方法（ものの本質のとらえ方）の問題で、聖書の論理の一つは事柄を分析的、部分的にではなく、総合的・全体的に把握・理解するということであるように思われる。聖書のデュナミス（力）の秘密の、少くも一つの淵源はここにあると言えよう。

この点で、これまでにその例示をすっかり失念していたが、古い欽定英訳（AV = KJV、1611年）はさすがに見識ある訳をしている（by the faith of Jesus Christ）。英語の“of”にもそれじたいに、ギリシア語

と同様、主語的、目的語的両様の意味があるので、この“of”もいずれにもとれる。いわば読者にその解釈を委ねているわけだが、その後の英訳はほとんど例外なく目的語的に解釈して、はっきり“in”と訳しているのである。

この欽定英訳を用いて、正に一刀両断とも言うべき明快な解釈を提示するのが、山本先生のガラテヤ書2章16節の講解である。（『ガラテヤ書講義』待晨堂、'67、『山本泰次郎聖書講義双書』9に所収）。

この「キリスト・イエスを信じる信仰」（「イエス・キリストへの信仰」（新共同訳—武藤）は、キリスト・イエスの信仰です。このの（所有格）はofあるいはinの意味で、前者とすればキリストご自身が神を信じたもう（そして信者に分け与えたもう）信仰となり、後者とすれば信者がキリストを神の子なる救い主として信じる信者自身の信仰となります。いずれともとれますが、古い前者の見方（AV—武藤）の方がはるかに深刻であることは明らかです。パウロはここで、信仰とはキリスト彼ご自身の信仰を分け与え、恵み与えたもうものであることを明らかにしているのでしょう。これは、信仰とはわれらが努め励んで信じるわれら自身の信仰であると考える一般の考え方とは非常にちがいます。しかしこのキリスト・イエスの信仰なればこそ、われらは信仰によって救われることができたのである、とパウロは言うのです。

故にパウロは、わたしたちもまた信じたのである、キリスト・イエスを（キリスト・イエスの中へ（エイス））、と言います。実に強い、また特異を言い方です。キリストの信仰を与えられ、キリストに信ぜしめられたので、そこで彼もキリス

トの中へ信じこむ、すべてをすてて、いなすべてをささげてキリストの中へ信じ込んだのです。これがパウロの信仰でした。

3

山本先生のこの講義を伺えば、もうこれ以上何も加えることはないのだが、いささかの私見を述べることをお許しいただきたい。まずは、前記「うれしさのあまり」綴った小文の、その「喜び」の一部を再録する。

これはすべての翻訳について言えることだが、とくに聖書にあっては訳は訳者の聖書解釈であり、ひいては彼の信仰告白とさえ言うるものである。それだからこそ、われわれは一方で聖書を自分の国語はもちろん、その他のいろいろな言葉で読めることをどんなにか感謝しながらも、なお聖書を原典で読みたい、いかにたどたどしくともギリシア語新約聖書を、あるいはヘブライ語旧約聖書を自分で読んでみたいと願うのである。そしてそれがたとえ素人の自己流な読み方であれ、自分自身の新しい訳をつけ得た時の喜びは何ものにも代え難い。聖書が全く新しくなったような思いがするものである。

「人が義とされる」こと、すなわちわれわれの救いの根拠は、「律法の行い」にあるのではないばかりか、「われわれの信仰」にあるのでもない。それはただ「キリスト・イエスの真実」にある。罪のゆえに神に対して真実でありえないわれわれに代わって、神に対して徹底的に真実であられたキリストの真実。罪のゆえにキリストの真実に対して真実でありえないわれわれに対

して示されるキリストの徹底的な真実のみが、人を義とし、われわれを救い、われわれを生かす（ガラテヤ2：20）唯一の道である。われわれの信仰は、ただこの一事を認め、この破格の恵みを感謝をもって受ける（真実に対し真実をもって応える）以外の何ものでもない。

パウロのこの重大な一句をこう訳しかえてみると、これらの節がどんなにすぐれて新しい霊的・信仰的現実をわれわれに開示することであろうか。

ところで、実は本稿は昨年末ちょうどテコア会の50回目の「クリスマス集会」で語った話を元にしてしている。クリスマスにふさわしい主題でないことを承知の上で、この話をしたのは、直接には友人内坂晃牧師の文章を読んだことにある。〔付〕として末尾に掲げたので、お読み下さい。「信仰」についての内坂さんの鋭い洞察は、私に、近来疑問がつのっていた「キリスト教」とその「信仰」について、強烈な衝撃とともに、深刻な共感と多大の示唆とを喚起してくれたのである。

見回せば現代の社会には、「信仰」（「宗教」という方がわかりやすいかも知れない）が満ち溢れている感がある。あっちでも、こっちでも「信仰」が幅を利かせている。

「信仰」の^{ファンティズム}熱狂が戦争と暴虐を引き起こし、「信仰」の^{エクスタシ}陶酔がテロと悲惨を生む。「信仰」が傲岸不遜な人間を作り、「信仰」が人間を非人間化する。まことに「信仰」こそが霊的驕慢と偶像崇拜の元凶であることが多い。

内坂さんは言う。「信仰というものの恐ろしさを、聖書は告げているとさえ言える」と。その通りである。「では、あるべき信仰の姿とは、一体何なのか」。

それは「イエス・キリストの信仰」に尽

きる。「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰による」（ローマ三・28）。その「信仰」とは「神の誠実」（同3）であり、「イエス・キリストの信実」である。人が義とされる、すなわち救われる根拠はこれ以外にない。それは全く客観的な出来事・事態であって、決して人間の主観的思惟や心情のことではない。それゆえ、私どもは徒らに自らの薄信を嘆いたり、ましてや自らの確信に恃んだりすることなく、ただ「神の信頼」（内坂）と「キリストの信実」に頼んで、「信じます。信仰のないわたしをお助け下さい」（マルコ九・24）と叫ぶ。これがイエス・キリストの福音であり、私どもの信仰である。ここに私どもの感謝と賛美があり、私どもの平和と希望がある。（07. 2. 25記）

〔付〕 神の信頼

内坂 晃

みな様少し意外に思われるかもしれませんが、聖書は信仰というものを、それ自体としては必ずしも肯定しているのではないということです。それどころか、信仰というものの恐ろしさを、聖書は告げているとさえ言えると思います。例えば、イスラエルの民がカナンの地に入って戦わねばならなかった相手は、バアル信仰でありました。しかし、ではヤハウエ信仰であるならば、それですべていいのかということ、決してそうではなかったのでありまして、歴代の預言者が戦ったのは、王や祭司やあるいは偽預言者の不信仰に対して戦ったというよりは、信仰に対して戦ったということであったと思います。

信仰の熱心があったからこそ、ユダの人々はバビロニアとか、あるいは新約に入

りますとローマ帝国といった大帝国と、無謀な戦いをしたのであります。信仰の熱心というものがなかったなら、そんなことは出来なかったわけです。そして、イエスを十字架へと追いやったのも、律法学者やパリサイ人の信仰であったと言える。パウロが激しく戦わねばならなかったのは、グノーシスやユダヤ主義者の「異なる福音」の信仰に対してでありました。信仰と名がつけば、それですべてが肯定されるかという決してそうではない。聖書はそうは描いていないということでもあります。では、あるべき信仰の姿とは、一体何なのか。それをこれから、ヨブ記を通してじっくり学んでいきたいと思っております。（『講解説教・ヨブ記』（教文館、'99）第一講より抄出）

（所載）

『テコア聖書集会 50周年記念文集』
（テコア聖書集会、2007年7月）

〔後記（2019年2月）〕

2018年11月刊行の『聖書協会共同訳』は、本稿に掲げた「イエス・キリストの信実」の全9か所をすべて、「イエス・キリストの真実」と訳出している。ただし、別訳として「イエス・キリストへの信仰」と注記している。